
Voice

春生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

V o i c e

【Nコード】

N 4 0 4 6 T

【作者名】

春生

【あらすじ】

数日の検査入院がきまった女の子と、入院中の男の子のお話です。特に恋愛モノではありません。むしろちょっと重いかもしれません。

結構前に思いつきでざーっと書きなぐった小説です。

ファンタジーばかり書いてる自分には珍しく現代背景ものです。

フィクションです。

病院、病気、入院といった背景ものですので、苦手な方はご注意ください

ださい。

架空の背景ばかりを使っていますので、キーワードにはファンタジ
ーを使わせていただいています。

始まり

穏やかな口調で館内放送が響くのは、適温の空調を施したロビー。大人が歩くスリッパの音に、小さな歩幅で歩く子供達の足音が混じる。

場所は、小児科診察室前。

付き添いで来ている子供や、緩い体調不良の子供達の騒ぐ声、それを怒る親の声が時折響く。広いロビーは、ほぼ満席状態だった。

そこは、小児科だけで数十の入院施設もある大きな病院だった。

全ての科の診察室が一階ロビーに集中している為、老人から子供まで診察待ちの人間が沢山いる。

点滴を常備した人なんて見渡せば沢山居て、車椅子や松葉杖、どこかしら体を故障した人も多く見受けられた。その一角、設置された公衆電話の受話器を置いた母親が、ずっと手を握っていた女の子を見下ろした。

三十代後半から四十代くらいの母親だろうか。

子供はまだ、小学二年生ほどだ。伸ばした髪を、二つに分け高い位置で結っている。

ずっと母親を見上げていた女の子は、片手に抱いていた大きな目のウサギのぬいぐるみを自分に押し付けるように抱き締めた。

母親を見る目が、涙で潤んでいる。

「ほんの数日の入院だからね」

諭されるように頭を撫でられた女の子は、ひとしきり泣き喚いた後のようだ。

まだ軽くしゃくり上げる動作は見せるが、どうにもならないことを理解しているようだった。

唇をきゅっと引き締めて小さく頷いた。

女の子の前にしゃがんで、母親が微笑みかける。

「大丈夫よ、お医者様も、看護婦さんも沢山いるからね。佐奈」

声を掛けられればかけられるほど、佐奈と呼ばれた女の子は涙が溢れそうになるのを必死に堪えているように見えた。

人が多い少ないの問題ではなく、子供の目から見たとき、どれだけこの病院という施設がだだっ広く恐ろしいものを、大人は忘れて
いる。

公衆電話の脇を通りかかって、たまたまそれを見かけた輝^{あきら}は、そう、
心でつぶやいた。

目線の違い

そこは大きな有名な病院で、患者は毎日後を絶たず、待合室はいつも満席だった。

一体人口のどれほどの人間が病気、怪我というものに遭遇しているのか、割合を探りたくなるほどだ。

すぐに治る病気ではない人は毎日のように来院し、看護婦さんや先生と親しくお話する人も居る。

毎日それらを見ていると、動きを止められてしまった看護婦さんが実は困っているな、というのが、輝には見て取れるようになっていた。

診察が終わっても、気候が良く広く居心地がいいのか、お年寄りや待合室に居座り仲間ですつとしゃべっている。

どうして病院にそんなに長く居たいのか、輝には全然分からなかったが、お年寄り達はとても楽しそうに毎日同じ事をしゃべっていた。そんな風景を見た後、そろそろ自分の病室に戻ろうとして、あの親子を見かけたのだった。

それも、小児科付近ではよく見かける風景で、輝にとってはもう、珍しくもなんともなかった。

朝の検診が始まる前に、輝はちゃんと自分のベッドに戻った。

ほぼ定時に、ほぼ決まった看護婦さんが笑顔で入ってくる。

「おはよう、輝くん。昨日は良く眠れたかな？」

「おはようございます。ちゃんと寝れたよ」

「そっか。えらいね。最近発作も起きないし、いい感じだね」

体温を測りながら、看護婦さんに頭をなでられるのもいつもの事だった。

輝は入院してから、そろそろ一年が経とうとしていた。

「昨日、先生がね、六年生になる頃には退院できるかもしれないっ

て言ってたよ」

「本当？」

「うん。嘘は言わないわよ。四月に進級だから・・・あと二ヶ月とちよつとだね、頑張ろうね」

「うん。頑張る・・・みて、この間友達が来てね、カードゲームのカード、お見舞いにくれたんだ。退院したらやろうって」

「あら、良いものもらったわねー？ どれが強いのか？」

「その一番端のカードが・・・」

確かに看護婦さんも、先生も、子供に対してはとても優しい。

でも、ずっと付いていてくれるわけではない。

自分に向けられてる感覚がなくなった瞬間、やはりこの施設は、子供には広く、孤独を感じるのだ。

慣れた輝でさえ、母親が来る時間を、時計を何度も見て待ちわびることが多いのだから。

安心飴

小児科の広い待合室で、佐奈は心もとなくイスに座っていた。床に届かない足がぶらぶらして、たまにスリッパが脱げてしまう。手放さないウサギのぬいぐるみを、ぎゅっと抱き締めて、母親と看護婦の難しそうな話が終わるのをじっと待つ時間が続いていた。

「佐奈、お母さん、向こうで手続き・・・ちよつと用事を済ませてくるから、ここで待っててね？」

話を振られて佐奈は、黙って頷いた。母親と看護婦が遠くに見える受付窓口あたりで話をしているのをしばらく見てから、佐奈はウサギの顔を両手で持って見詰めた。

「にゅういんするんだって。 みーちゃん是一緒に居れるのかなあ？」

みーちゃん、と呼ばれたウサギのぬいぐるみは、変わらない笑顔を佐奈に返し続けた。

返ってこない答えに不安が煽られて、また視界が滲み出す。

その佐奈の視界の端っこに、不意にオレンジ色が割り込んできた。怖い感じも無く入ってきたそれに、目を向けて、誰かが差し出した棒付きの飴だと分かって、持った手をたどって顔を上げると、男の子が立っていた。

青いパジャマに上着を羽織った、とても髪の毛の短い男の子だ。佐奈より少しお兄さんだった。

佐奈と目があうと、男の子は少し笑って、更に飴を佐奈に近寄せた。言葉が交わされなくても、それがあげると言う合図だと分かった。人見知りの激しい佐奈は、飴を受け取ると、耳まで真っ赤になって俯いた。

（ありがとういわなきゃ、ありがとう・・・！）
何度か心で恥ずかしいと思う自分と格闘して、ようやく顔を上げたとき、男の子はもう近くに居なかった。

慌てて回りを見渡すと、すれ違いに母親と看護婦が佐奈の元に返ってくる場所だった。

「あら？　佐奈、飴どうしたの？」

「さっき、お兄ちゃんがくれたの」

「お兄ちゃん？」

「うん。お兄ちゃん。・・・えっと、あの子。　佐奈お礼いえなかったの」

飴とぬいぐるみを片手に持ち直して、歩き去っている背中を佐奈は指差した。

その先を母親と看護婦が見て、看護婦のほうで、「ああ、輝くんかと、名前を口にした。

すぐに、よかったね、お礼はまた今度でも言おうね。と頭を撫でてもらって、佐奈は素直に頷いた。

飴を口に含むと、甘いオレンジが口いっぱい広がった。さっきまで怖くて潤んでいた瞳は、緊張が解かれてほころんだ。

そのあと、看護婦が輝について簡単な説明を母親にしていたが、佐奈はみーちゃんに飴をもらった報告をしていたので、すっかりそれを聞きそびれてしまった。

左右の道

佐奈の病室は、ベッドが六つつあった。

それぞれがカーテンで区切られていて、それぞれのベッドには、一人ひとりが陣取り、本を読んだり、ポータブルのゲーム機を使っていたりしていた。

お隣や、お向かいのベッドの付き添いのお母さんと、佐奈のお母さんが簡単に挨拶をしている間に、佐奈も自分のベッドに座ってみた。ばっちりアイロンされたベッドカバーは少し冷たく感じて、ベッドのクッションは家で使っているものよりずっと硬かった。

壁にも、掛け布団にも、小児科らしい可愛い動物の絵柄が使われていて、佐奈は最初全て珍しくて怖さなんて忘れていた。

テレビで見た子供向けアニメのヒーローの切り絵が張ってあったり、ちょっとしたアトラクションみたいにさえ思えた。

やがて、母親が帰って、佐奈は一人になった。

大好きな本を読んだり、買ってくれた落書き帳に絵を描いたりしていたけど、そのうち飽きて、テレビが見れると教えてもらった部屋へ入ってみた。

でも、やっていたのはちょうど男の子たちが好きな怪獣が出てくるようなテレビで、楽しくなくて佐奈は廊下をうろうろした。

足がなんとなくきたのは、夕方の外来が終わりかけた受付ロビーだった。

どこの科でもそうだが、入院患者も一般外来にまぎれて診察を受けることもある。

点滴の管を指したまま歩いている人をみると、佐奈はまた少し怖くなってきた。

そんな中、飴をくれた男の子を目に止めて、早足で追いかけた。すぐ後ろまで近付いたけれど、声をかけるのも恥ずかしいし、服を掴むのも恥ずかしくて少しの間黙って後ろを付いて歩いていた。

と、男の子が立ち止まって後ろを振り返った。

佐奈は驚いて、同時にまた緊張してしまって顔を真っ赤にした。ウサギのみーちゃんをぎゅっと抱き締めて、顔を俯かせて黙り込んでしまう。

そんな様子を見て、通りかかった看護婦が声をかけてきた。

「あら？輝くんどうしたの？・・・えっと、こっちは・・・今日入院が決まった佐奈ちゃんよね」

やさしい笑顔の看護婦を見て、佐奈は小さく頷いた。

「佐奈ちゃん、輝くんに何か用事かな？」

佐奈はまた言葉に詰まった。用事というわけでもなく、知っている顔を見つけて嬉しかったのだ。

だから後に付いてきただけで、別に用事という用事も無い。

そんなことを言うのと怒られるかもしれない。

黙ってしまった佐奈に、看護婦が助け舟を出してくれた。

「あ、佐奈ちゃん、聞いたよ。輝くんに飴もらったんだよね？もしかして、そのお礼を言いに来たのかな？」

はっとして、佐奈は頷いた。

「そっかそっか。じゃあ。ちゃんとお礼言ってみようか」

促されて、佐奈はちらりと輝を見上げて、やはりすぐにみーちゃんに顔を埋めて、小さな声を絞りだした。

「・・・ありがとう」

すぐ帰ってこない言葉に不安になって、顔を上げて輝をみると、輝は佐奈と目を合わせて笑ってくれた。

「よく言えたね。佐奈ちゃん。もうすぐ夜ご飯だから、ベッドに戻ろうか。帰り道、分かるかな？」

看護婦さんに褒められたのと、お礼を言えた満足感から、佐奈は笑顔になったが、いまいち帰り道が不安だった。

それを告げると、看護婦が部屋まで送ってくれることになった。

「輝くんも、途中まで一緒にいこうか」

看護婦に問われて、輝は黙って頷いた。そして、階段を登ったところ

ろで、輝は佐奈に手を振って右に去っていった。

「・・・輝お兄ちゃんは、こっちじゃないの？」

手を引く看護婦に問いかけると、看護婦はいつもと変わらない笑顔を返してきた。

「輝くんはね、佐奈ちゃんと違う病気だから、違うお部屋にいるんだよ」

「ふうん・・・」

佐奈はちらりと輝が去ったほうを振り返ったが、その背中はまだ確認できなかった。

夕方遅くになってまた戻ってきてくれた母親が、今夜は病室に泊まってくれる事を知って佐奈は素直に喜んだ。

母親が一旦帰宅してから、描いた落書きや、読んだ本の話し、それから輝の事も佐奈は母親に話した。

カーテンでしか区切っていないから、なるべく小さな声でお話しなさいといわれたので、佐奈は声をすばめて母親に話を続けた。

「輝お兄ちゃんね、わたしが話しかけてもないのに、振り返ったの。すごいでしょ。それからね、佐奈、飴のお礼ちゃんと言えたんだよ」

「そう、佐奈えらかったね」

「それでね、輝おにいちちゃんね、階段あがってきて、右側のお部屋なんだって。佐奈、遊びに行ってもいいかなあ？」

「ええ、そうね。でも、お兄ちゃんにも用事があるだろうから、お母さんが看護婦さんに一回聞いて見てあげるわね。それまでは勝手にいっちゃだめよ？・・・さ、明日は朝から検査だから、今日はおう寝なさい」

「はい。みーちゃんもお休み」

ぬいぐるみを自分の横に寝かせて、掛け布団をかけてやると、佐奈もやがて眠りに付いた。

階段を上がって右側の部屋は個室部屋。

少々重い病状の子供たちが入る病室であることを、母親は佐奈に伝える事が出来なかった。

人の間をつなげるもの

母親から、看護婦を伝い、翌日にはその話が輝に伝わった。

病室で看護婦が伝えてきた内容に、輝は正直、戸惑ってしまった。

「大丈夫かな？オレでも」

「佐奈ちゃんは、輝くんをとても慕っているみたいよ」

「じゃあ、話を聞くだけなら、オレが向こうに行くよ。それは大

丈夫だよな？」

「あら？こっちに呼ぶんじゃないくて・・・大丈夫？」

「うん。多分、平気だよ。友達もよく一方的に話していくし。それに、こんな状況みたら、あの子怖がりだから、怖がっちゃうかもしれないじゃん」

「じゃあ、時間を決めて、お話しするのは長くなっても一時間までというのはいかがしら？ 佐奈ちゃんも、今日から検査だし疲れると思うから」

「うん。わかった。佐奈ちゃんはどこが悪いの？」

「遊んでる途中に、ちょっと高いところから落ちたのよ。だから、異常がないかの検査入院なの。数日で退院予定よ」

「そっか。羨ましいな」

「輝くんも、今、調子が良いし、あとちょっとで退院予定だよ。

頑張ろうね」

「うん。ありがと」

話し合いの結果、輝が佐奈のところに遊びに行くのは、昼間の二時からと決まった。

ちょうど佐奈の母親も仕事の時間で、一番退屈になる時間でもあった。

最初是一回だけの予定だった訪問は、佐奈の希望で退院まで毎日続く事となった。

輝がカーテンをあけると、佐奈が笑顔になった。

最初は激しい人見知りの佐奈は、余りしゃべらなかった。付き添いの看護婦が間に立ち、言葉を繋ぐと、それも徐々に緩和し始めた。最終的に緊張が解かれると、佐奈はとても良くしゃべるようになった。

うさぎのぬいぐるみのみーちゃんが、お父さんからの誕生日のプレゼントだと言うこと。

もう、三年も前からずっと一緒だということ。

お絵かきや、本を読むのが大好きで、描いた絵の説明や、読んだ本の説明。

それから、家では小さな犬を飼っていて、たまにみーちゃんを取られてしまうのだと言うこと。

そんなときは、佐奈はお姉さんだから、我慢して貸してあげるのだとか。

短い時間のうちに、佐奈は沢山の事を話した。

輝は黙って話を聞いた。佐奈が顔を見ると、頷いたり、笑顔をくれたりした。

毎日輝が持ってきてくれるオレンジの飴は、佐奈の大好きなおやつになった。

「・・・佐奈、退院したくないなあ」

そのつぶやきは、佐奈が明日、退院となった日の午後だった。

検査の結果は全て良好で、退院が決まった絶好の日のはずだった。

佐奈はみーちゃんを抱き締めて、ポツポツと言葉を紡ぐ。

「だってね、教室怖い。皆大きな声でお話するから、佐奈怖くて・・・黙っちゃう」

「・・・」

「お絵かきもね、皆に見られるの恥ずかしいの。おかあさんとか、輝お兄ちゃんは怖くないけど・・・皆上手だから、佐奈絶対へただっと思われちゃうし、笑われちゃう。でも皆見せて見せて言うの。とっても怖いから、なんにも言えないの」

みーちゃんを抱く佐奈の目に、涙が滲み始めた。

「ここだったら、皆優しいもん。検査は怖いけど・・・」

目に溜まった涙をぬぐいながら、佐奈は輝を見上げた。

「輝お兄ちゃんは、どうして何も喋ってくれないの？佐奈の事怖いの？嫌いな？」

「・・・」

それを輝が聞き届けるのと、看護婦が慌てて割って入ったのは同時だった。

看護婦が時間終了を告げて、泣き出した佐奈をあやしている間に、輝は自分で病室へと戻った。

ベッドに戻って、輝は立てた膝に頬を当てながら、冬の重い空が見える窓を眺めた。

『しゃべるのおせえよ。もうちょっと早くできねえの？』

『正直、ちょっとめんどくさいよな。でも、しょうがないもんな』

「・・・」

友達に言われた事のある、何気ない言葉が、輝の脳裏に生々しく蘇よみがえってきた。

やがて様子を見に来た看護婦が、輝に佐奈との話す時間を持ちかけたことを謝ってきた。

輝は、どうしてあやまるのかと笑い、これから自分が何度も受けることだから、と、言っただけ。

そして、一つ看護婦にお願いを申し出た。

心の間をつなげるもの

佐奈はそのまま退院の朝を迎えた。母親は大きめのカバンに沢山の荷物を詰め込んで、帰宅の準備をしていた。

大事なお絵かき帳も、本も、その中に納まった。

来た時と同じように、佐奈はうさぎのみーちゃんを片手でぎゅっと抱き締めて、母親と手をつないで、泣き顔だった。

誰にも何も言われなかったが、昨日、輝を傷つけてしまったんだと空気で分かっていたからだ。

階段まで来たとき、母親が佐奈に声をかけた。

「佐奈、輝くんがね、家に帰る前に、よかったら部屋においで。って言ってたんだって。どうする？・・・行く？」

優しく問いかけられて、佐奈は、戸惑いながらも頷いた。

初めて入った階段の右側の廊下は、左側より冷たく静かな感じがした。

大部屋では、ゲームをする音や、隣同士のベッドで子供達の話す声、体調が大分戻った子供達が走るスリッパの音、色んな音がしていて、それが廊下にも漏れていた。

個室が並ぶそこには、それらがなかったのだ。

それを、佐奈は、冷たく寒いと感じた。

同じ電気を使ってるはずなのに、少し暗く寂しくも感じた。

母親と手をつないで居なければ、みーちゃんを抱いていなければ、

佐奈は多分怖くて右側の廊下を歩いていなかった。

一部屋の前に立って、母親が小さくノックをした。

看護婦の返事が中から届いて、部屋に入る。

個室の病室は、佐奈が思っていたより広かった。

大きな機械が幾つも置いてあって、ベッドがあつて、そこに輝の姿があつた。

窓からの緩い冬の光を受けて、ベッドに座っている輝の姿は、佐奈

がいつも見る輝とは別人に見えた。

輝を傷つけた、怒らせたと思っている佐奈は、足取り重く、母親に手を引かれベッドの横に歩み寄った。

ベッドに設置されているパソコンのキーボードを、輝が慣れた手つきで入力した。

接続されている画面を、看護婦が佐奈にも見えるように角度を調整してくれる。

そこをみて、佐奈は目を丸くした。

「おはよう。佐奈ちゃん」

状況がまったく読み取れない佐奈の目に、映る文字が増えていく。

「オレは、とても たかい ねつが出てしまつて、声が出なくなつたんだ。だから、これがオレのこえなんだ」

母親が、少し悲しい空気を帯びたのを、繋いだ手から佐奈は感じ取った。

「・・・お話、できないの？」

佐奈が目を丸くしたまま、輝を見た。目があった輝は小さく笑って頷いた。

そのあと、輝が画面を指差した。声を聞いてくれという合図だ。佐奈の目が指に誘導されて、画面に戻ったのを確認してから、キーを入力する音が始まる。

「佐奈ちゃんが、こわがるかなと思って、見せられなかったんだ。でも、きのうの佐奈ちゃんの話聞いて、きもちがかわったよ」

「ごめんね、オレがしゃべれなくても、佐奈ちゃん たくさん話してくれたから、たのしいんだと思ってたんだ。でも、ちがったみたいで、佐奈ちゃんはオレにしゃべって ほしかったんだね？」

「昨日言ったもんね？ どうして なにも しゃべってくれないの？
って」

画面を見て、慌てた様子で佐奈が輝を見上げた。

「輝お兄ちゃんが、おはなしできないの、知らなかったの！ほんとだよ！」

難しいことは分からなかったが、とにかく怖くなって佐奈は言葉を口にした。緊張して高潮した顔を涙が伝った。

看護婦が佐奈の傍によって、その涙をやさしく拭った。

「佐奈ちゃん、輝くんとお話するときは、泣いてたらできないんだよ。頑張って」

佐奈はまた溢れてくる涙を手でふき取って、画面を見た。言葉は再び並び始めた。

「おこってないよ。ちょっと、くやしかったけど」

「佐奈ちゃん、オレ 佐奈ちゃんの話 楽しかったよ？佐奈ちゃんは、オレに、自分のこと、きらいなの？って聞いたよね？」

「きらいなんかじゃないよ。オレがしゃべらないから、そんな気持ちになったんだね ごめんね」

「佐奈ちゃんの教室のみんなも、そうかもしれないよ。佐奈ちゃんが だまっちゃうから、嫌われてるのかなって思っちゃうのかも。とってもとっても、ゆうきがいると思うけど、そんなにすてきな声が出せるんだから、しゃべらないともったいないよ」

「せっかく、こえをもってるのに、少しずるいよ。そんなにしゃべるのが嫌なら、オレに声をちょうだい」

佐奈はその言葉に怯えて首を振った。その様子を見て、輝は優しい笑顔を見せた。その裏ある悲しげな表情を、諦めというのでしょうかもない気持ちを、大人たちは汲み取った。

佐奈の隣では、母親が耐え切れず目に溜まった涙を拭いた。

「じょうだんだよ。ごめん。・・・でも、もうあんなこと言わないで。こえにできるって、本当にすごい事なんだ。学校にいったら、がんばってみて。おうえんしてるよ」

「退院おめでとう。佐奈ちゃん。元気でね」

最後の言葉を入力すると、輝は最初の日にあげたのと同じ飴を佐奈に手渡した。

飴を受け取ると、佐奈は声を上げて泣きじゃくった。

複雑すぎて、処理しきれない様々な想いが、病室に散らばっていた。

数ヵ月後 病院受付に一人の女の子が駆け込んだ。

顔を知った看護婦を見つけて、笑顔で駆け寄る。

「佐奈ちゃん、体はもう大丈夫？」

「うん！」

「あら？今日はみーちゃん、一緒じゃないのね？」

「みーちゃんは、お家でお留守番なの。今日ね、輝お兄ちゃんのお見舞いにきたの。お部屋行ってもいい？」

「・・・」

「・・・？」

「佐奈ちゃん、輝くんねえ、元気になって退院したのよ」

「えー?! じゃあお家はどこ? 佐奈、お家に遊びに行きたい」

「輝くんのお家はね、とても遠いの。だから佐奈ちゃん、なかなか逢いにいけないかな・・・行くとしたら、もう少し大きくなってからだね」

「・・・そうなんだあ・・・? 佐奈ね、お絵かきで賞もらったんだよ。それでね、頑張ってお話したら、皆とお友達になれたんだよ」
「そうだったんだ。よかったわねえ、佐奈ちゃん」

「すごく怖かったけど、輝お兄ちゃんが頑張れて応援してるって言うてくれたから、思い出して頑張れたんだよ。それを輝お兄ちゃんにも教えたかったんだ」

「輝くんも、佐奈ちゃんならできるよねって言うたのよ。聞いたらきつと喜ぶわ」

佐奈はとても嬉しそうに、満面の笑みを見せた。その手にはお見舞いの品だという一本の棒付き飴が握られていた。

お小遣いで買ったという飴だった。看護婦は代わりに渡すことを約束して飴を預かると、母親と視線を交わした。

二人は言葉なく会話をする、会釈を交わした。

心の間をつなげるもの（後書き）

これにて終了になります。

拝読、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4046t/>

Voice

2011年6月4日16時55分発行